

R. H. Tawneyによるイギリス資本主義の

成初期の研究について

高川 雄 美 子

はじめに

「資本主義」という言葉は、日常よく耳にするが、「封建制」や「重商主義」といった言葉と同じように、厳密に定義することは、はなはだ難しい。「もしも資本主義というものが、資本の所有者たちが自分らの金銭欲のために産業を管理することと、資本と資本家によって支配される賃金労働者とのあいだの社会関係とを意味するものであれば、資本主義は、中世のイタリアにも中世のフランドルにも、すでに大規模に存在していたといえるのである。」と「Tawney」は述べている。なるほど資本主義が、単に利潤追求の営みならば、世界史上どの時代のどの地域にも存在していたといえる。

宗教の社会観や社会的な影響力について、一つの理論を系統立てようとしたドイツの学者 Max Weber は、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中で、「資本主義の精神」

について論じている。Weber が「資本主義の精神」という場合は、近代的産業資本に適合する近代の資本主義 (der moderne Kapitalismus) の精神なのである。すなわち Weber は、西ヨーロッパ、アメリカの近代資本主義を、「人類の歴史とともに古い」資本主義と区別している。「『資本主義』は中国にも、インドにも、バビロンにも、また古代にも、中世にも存在していた。……それらの資本主義は……」近代の資本主義と「決定的な意味をもつ諸特徴についてみれば、遠くかけはなれたものであった。」⁽⁶⁾そして、「人類の歴史とともに古い」資本主義に対抗して近代の資本主義が現われて来ると論するのである。⁽⁶⁾

西洋における近代資本主義は、産業革命を契機として完成した形を示すようになった。ということとは異論のないことである。⁽⁷⁾ 本稿では、イギリス近代資本主義の完成までとりあげることは、とてもできないので、Richard Henry Tawney の論文を通して、イギリス近代資本主義の成初期を、経済史的な側面と

精神史的な側面から研究したものを発表する次第である。

- (1) 『宗教と資本主義の興隆』 Tawney 著。出口勇蔵・越智武臣訳。岩波文庫 下巻一四四頁。
- (2) 「人類の歴史とともに古い」この言葉は『近代資本主義の系譜』大塚久雄著 学生書房九八頁——「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」Max Weber 著。堀山力・大塚久雄訳 岩波文庫 上巻一四二頁より引用。
- (3) 「人類の歴史とともに古い」資本主義（前期的資本主義）を Weber は、「賤民的資本主義」Para-Kapitalismus と名づけた。¹⁾
- (4)・(5) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』上巻四四頁 下巻一九八頁 ここで上巻一四三頁を参照。「自由な（形式上）賃金労働者たちの労働上の上に築かれる『合理的・経営的な産業組織』このような産業経営の普及に基づいて、社会の『欲求充足がもたらす市場関係と収利性を指向しながら遂行される』そのような域まで到達した営利経済」を近代資本主義は意味する。
- (6) 前掲論文 上巻一四三頁。
- (7) 『近代資本主義の系譜』七三頁。

I Gentry の勃興

封建制の下部構造をなす荘園制度の崩壊は、イギリス中世末

期の社会経済史のもっとも重要な問題である。これは貨幣経済の発展を契機として、賦役労働Ⅱ労働地代による領主直営地経営の解体、それともなう賦役労働の金納化、直営地の貸出しという過程となつてあらわれた封建的危機Ⅱ領主的危機であり、封建的生産関係の基本的条件の破壊であった。しかし、ここで注意しなければならないことは、賦役制を領主制的取戻関係の基軸として、さらに農村共同体的規制をその支柱として構成される封建的土地所有制と農奴制が、その基礎的条件をなしている中部および南部の典型的荘園の他に、東部および北部に、荘園化過程に抵抗しつづけた自由なもしくは無領主村落があったということである。¹⁾ このような非荘園の所領に自由農民の残存したことは、それ以外の Manor 社会と顕著な対照をなした。それ故、中小 Manor ないし、非荘園的所領は、典型的荘園と並んで、中世イギリス封建社会の重要な構成要素をなしていたのである。²⁾

農民経済をある程度独立させ、領主農民関係に契約的要素をもたらした貨幣地代³⁾は農奴解放に少なからぬ意義を持つていた。それは、労働地代と現物地代を金納に代替させたことにより、農民が人格的自由を得ることが出来たということである。この人格的自由によつて富農は、獲得した土地や蓄積した貨幣を、領主に取り戻らなくなった。だが、初期の代納制が農奴を強制労働から解放したとは、一概にいえない理由がある。「領主

の借地人として、農民はなおかつ土地に附随した諸義務を負い、しばしば貨幣地代とともに、労働地代や物納地代もなお若干残存した。かれはもはや法的には土地と領主に束縛されなかつたが、実際の必要上その保有地に結びつけられていたので、封建地代はなお重く、かれの上のしかゝつていた。⁽⁶⁾そして短期間ではあるが、先に述べたような典型的荘園においては、貨幣経済の進行に平行して封建的反動が起つた。他方、小規模な非荘園的・世俗的所領においては、貨幣地代が増大しつゝあつた。「即ち、『領主経済』自体が直接に商業化し、貨幣経済化する場合、一般的に賦役が増大して行くいわゆる『領主型』を展開するのに對比して『農民経済』が直接に比較的地方的な商品・貨幣経済の中にまぎこまれる場合には貨幣地代の増大して行くいわゆる『農民型』を展開する。」⁽⁷⁾

貨幣経済の進展は、一方に賦役の増大と農型的荘園形成をもたらし、他方に貨幣地代の増大と荘園制解体を誘致したので、封建的土地所有者層は二層に分化した。そして小貴族 *gentility* と自由土地保有農の上層、これに市民的（商業資本家的）要素が加わつて *gentry* 層が形成され、かつ急速に増加して行つた。⁽⁸⁾ その結果、典型的荘園を経済的基礎とする大貴族 *baronage* との社会的性格の差がますます判然として行くのである。

「Tudor 朝の時代は商業の時代であり、後になるほど、ま

ずます商業が繁栄してくる。」⁽⁹⁾ 「Henry Ⅲ の治世から政府は、貿易と産業を奨励する条件育成へ関心を向けていったので、この点まさしく、商業の時代であつたといえる。」⁽¹⁰⁾ そして「イギリスの社会機構は、この著しい商業活動が、またたくまに農業と土地関係に反応するような仕組になつてゐる。ある国々では商業と農業の間に、はつきりとした線が引かれ、地主は品位を落さず貿易に従事することができず、商人もまた貴族の土地を買えなかつた。イギリスでは、このような例はみられない。」⁽¹¹⁾ イギリスにおける「地主階級の脱落者たちは、大陸におけるように、古い身分にしがみついてその階級全部を沈めてしまふようなことはせず、収入がなくなると慎しみ深く姿を消していったし、成功者たちは新しい貴族になり上つていった。貴族になつたものは、一人にとどまらなかつた。」⁽¹²⁾ 即ち社会構成体の上層部が、崩壊しつつ同時に再構成されていったのである。そしてイギリスにおける社会階層の区分は身分と法律上の特権によるのではなくて、富の多少によつて階層が決つたと *Lawney* は考へる。*Lawney* によれば、*gentry* とは *knight* を含み、自由の下から補充されて来る階層であつた。それ故、不統一はやむをえず、特殊事情によつて生じた弾力性は、正確な分類をするのには、都合のよいものではない。「しかしこういふ曖昧さにもかゝらず、この社会層を見分けることは困難ではなかつた。その構成員の富には非常な差があつたし、その両端は不揃

いであつたけれども、しかし中核ははつきりとまとまっていた。この中核を構成していたのは、まず *yeoman* よりは上で貴族よりは下の土地所有者と、これに加えて、かつての貧農のあとをついで、直営地の定期借地人となつた裕福な借地農や、あるいはその一族の小作人たち、つぎに、有名な法律家や僧侶や、ときには医者などというような、やはり急激に増えつゝあつた専門職業の人々、そして裕福な商人たちであつた。」と *Tawney* は述べている。

では、地主という点で *gentry* と同じであつた貴族の没落を、*Tawney* はどのように説明するのであるうか。

「名門旧家は大きな所領をうけついでいるとともに、しばしば大きな負担をもうけついでいた。その経費は昔どおり大きなものであつたが、収入は昔どおりではなくなつていた。」それに「代々の負担に加えて、新しい奢侈と流行の世界があらわれ来る。」このため貴族の財産は、見かけ倒しとなつていた。

「大所領を支配している行政機構は、国家機構と同様の欠陥を縮図的にもつていた。それは繁雑で、保守的で、伝統的なやり方から新しい投機的企業的なやり方へは、なかなか変えられなかつた。」貴族の生活に、くらかの改良がなされたが、一時の気休めにすぎなかつたと *Tawney* は考へた。*Tawney* のいわんとするところは、旧貴族は豊かな富をうけつぎながら、これを経済面で利用して行く能力がなかつた。これに対して、*gentry*

たちの多くは鋭敏な借地農であり、事業家であつて、商業の発展や改良農法の成果をより良くとりいれうる立場にあつた。それ故、一連の農業革命の甘い汁を吸つたのは、*gentry* たちであつた。そして農業革命の結果は大所有地と小所有地の減少であり、中所有地の増加であつた、ということである。

(1) 『イギリス農村社会経済史』新井嘉之作著、御茶の水書房八五頁。

(2) 前掲論文八四—八五頁

(3) 解放の強制的売却により貧しい農民は、高利貸の債奴になつたということ。即ち自由の購買が農民の階層分化過程を促進させたということも留意されたい。

(4) 『イギリス農村社会経済史』新井嘉之作著。一〇八頁。イギリスのいわゆる正統派史学者の見解——封建的反動の一因は、一二世紀における急速な人口増加とそれともなう土地不足であつたとする。即ち、農奴の家族数が増加するにつれ、一人の農民に帰する開放耕地内の地条の数は少くなつた。生活手段に対する人口の圧力と耕作地をもとめての競争は、領主の管理人が農奴との間により苛酷な契約を結び、他の土地の保有条件として領主直営地の耕作労働の要求をより嚴重に再強制することを可能にしたと考へられる。

(6) 『イギリス農村社会経済史』新井嘉之作著。一一三頁。大規模所領——大貴族 *baronage* 賦役増大 中小規模所領——小貴族 *knighthood* 貨幣地代の増大ということになる。

(7) 『イギリス農村社会経済史』新井嘉之作著。一一三頁。大規模所領——大貴族 *baronage* 賦役増大 中小規模所領——小貴族 *knighthood* 貨幣地代の増大ということになる。

- (8) 『イギリス農村社会経済史』新井嘉之著作 一五〇頁
- (9) R. H. Tawney, *Agrarian Problem in the Sixteenth Century*. P.185
- (10) *Ibid*, P185. 並名を思われし——acts of the Privy Council を Henry VII, Henry VIII, Elizabeth 女王三世の Domestic State Papers に於いて政府が、産業商業を促進させる方策の工夫で、どんなに専念していたか、よくわかる。
- (11) *Ibid*, P187
- (12) 『シェンナーリーの勃興』Tawney 著、浜林正夫訳、未来社 一一頁
- (13) 一五・一六世紀におけるイギリス農民は、その土地保有の法的形式からみると、自由土地保有農 freeholder 慣習的土地保有農 customary tenant と定期小作農 lease-holder の三種類から構成されていた。そして、法律家に依ると freeholder のうち年収 40 shilling 以上を有し自耕者者が、yeoman と呼ばれていた。こういった範囲を Tawney は押広げ富裕かつ自由になつた customary tenant の上層を併せて、yeoman と考へてゐる。
- R. H. Tawney, *Agrarian Problem in the Sixteenth Century* P22—28
- (14) 『シェンナーリーの勃興』Tawney 著 二三頁
- (15) 前掲論文二二頁
- (16)・(17) 前掲論文二二頁
- (18) 前掲論文二二三頁

II 宗教と資本主義の興隆

Weber は、Montesquieu の「法の精神」第二〇巻七章にある文章—イギリス人は三つの重要なことから、即ち、信仰と商業と自由とにおいては、他の国民よりは、はるかに立ちまゝつていた—から、イギリス人が、信仰に負うて、政治上の自由な諸制度を作り上げたのと同じように、営利活動の領域において卓越していたこともまた信仰に負うところがあるのではないか⁽¹⁾ という疑問を持ち、営利活動と信仰との関係を結びつけるのに、カルヴィニズムが大きな役割をはたしたと考へた。Weber の場合、問題を解く鍵がカルヴィニズムにあつたので、当然のこととしてカルヴィニズムが彼の論理の中で大きな位置をしめたのである。Tawney と Weber の論理の決定的な分岐点は、カルヴィニズムに対する考へ方の違いから導き出される。Tawney は Calvin の高利論に、Weber は職業倫理にスポットをあててゐる。

Tawney は、カルヴィニズムの誕生によつて「永い間の道德的、精神的な葛藤のあとで、社会的便宜主義についての新しい観念が芽ばえ、経済思想の新しい筋道が生れた」と考へた。また Tawney は、カルヴィニズムに、経済問題を処理する場合、独自の規範、厳格なひとつの規範があつたことを認めてゐる⁽²⁾。しかしながら、Tawney は「おほそ思想」といふものは、

それが実現されるとなると、往々にして、それを唱えたものを当惑させるような系譜をもっているものだ。」と述べている。そして Tawney によれば、「ある歴史家たちも論じているように、自由放任の哲学が中産階級のあいだに Calvin 主義がひろがった結果として生まれきたとしても、それも間接的なまわり道を通じてそうだったまでのことで、この点、宗教的寛容の発展とよく似ているのであり、自由放任の哲学が受け入れられたからではなくて、むしろ Calvin 主義の歴史からいえば、ずっとのちになって Calvin 主義が修正を受けた結果としてか、または、たがいに争っている権力者たちのあいだの勢力均衡の結果としてか、そのどちらかとしてその哲学は受け入れられたのである。」⁽⁶⁾「……結局のところ、理論と実践とはどこまでも別なものであるから、理論を吟味するということとは、あなたがち抽象的なものを追いまわすことにはならないのである。」⁽⁶⁾また Tawney は統べる Calvin は多くの制限をもうけたものの、適度な利子を許したので、Calvin 主義の「はじめは、権威主義的な統制主義の典型であったが、そのおわりには功利主義に近い個人主義に則ったものになっていた。」⁽⁶⁾「実業界に気に入られた個人主義は、清教主義の著しい特徴となり、また一つの政治力となることによって、世俗化するとともに妥協へと進んでいった。」⁽⁹⁾要するに、Tawney は、価値の標準が変わって人間として生れながらもっている弱点が、評判のよい

美德にかわってきたのだと論述する。Tawney のいうように、清教主義がたとえ Calvin の神学であったにせよ、商業の盛んな時代の実際の必要にせまられ、「世俗化するとともに、妥協の道へと進んでいった」のなり、当時勃興しつつあった gentry 層にとって、好都合の宗教であったかもしれない。

- (1) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』上巻 三三頁
- (2) 『宗教と資本主義の興隆』上巻 一一六頁
- (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) 前掲論文。上巻 一七四頁、上巻 四八頁、上巻 一八七頁、上巻 三八頁、上巻 一九五頁(下巻 一四六)、下巻 一三七・下巻 一四八頁

まとめ

ここで、Tawney の論じた gentry 層についても一度ふりかえて考えることにする。Tawney によれば gentry 階級とは、「貴族よりは下で yeoman よりは上」の階級であった。これによると、一見、gentry 階級を構成している人たちは明らかになようであるが、実ははなはだ曖昧なのである。この場合の貴族は旧貴族のことであり、新貴族 new men を含んでいないのである。旧貴族と新貴族の限界は相互に混っているので、両者を区別することは困難である。それに、一般的にいえば、yeoman と gentry の区別は「土地を耕すか、耕さないか」にあるのに、Tawney は yeoman であっても経済的地位の向上によって gentry 層に補充されていたと考えている。その上、「裕

福な借地農や、あるいはその一族の小作人たち」までも gentry 層に加えているので、「土地を耕すか、耕さないか」というリトマス試験紙は、すっかり効力を失っているのである。それ故、土地を持ち経済活動を行っている者はすべて gentry 層に含まれることになってしまふ。なるほど Tawney は gentry たちが、地主であり、同時に商人・金融業者であることを是認している⁽⁴⁾。そして、このように論理を展開することによって、Tawney は清教主義が gentry 階級に受け入れられたことを説明しえた。だが、結果的に清教徒革命を、没落貴族階級と gentry 階級—独占資本家、金融業者、金利生活者をも含んだ階級—の対抗と考えなければならなくなった。こうして Tawney は gentry の存在にこだわり、過大評価することによって、非常に大きな混乱に落ち入ってしまったのである⁽³⁾。

Calvin は、適度な利子を許しはしなかった。「利子禁止の有無が—それに類するものは、世界中のあらゆる宗教倫理に、ほとんど一樣にみられるものだ—はかならぬカトリシズムと宗教改革の倫理とを分かつ決定的相違点だと頭から前提してかゝるなどというのは、まったくひどい話である⁽⁴⁾」。Calvin、カルヴィニズム、およびその他の「Puritan」諸教派の「建設者、あるいは代表者たちが、われわれのいう『資本主義精神』の喚起を何らかの意味で生涯の目的としたなどというように解されてはならない。彼らのうちの誰かと世俗的財貨の追求を自己目

的として、これに倫理的価値を認めたというようなことは到底考えられないであろう。』⁽⁵⁾ 以上のように考えた Weber は、正しかったといえる。Tawney は Calvin の高利論をとることによって、清教徒革命を論ずるのに無理をしなければならなくなったのである。

Weber によれば、Puritan は「賤民的資本主義」的「商社会社、高利貸業者、『両替する者』、イギリス国教会や国王、議會から庇護された独占商人、大投機業者、銀行業者に対して激烈な闘争を企てた」⁽⁶⁾のであった。こうすることによって、彼らは反倫理的性格をもつ商人や高利貸を「解放」するどころか「束縛することによって、近代の産業資本に適合する『資本主義の精神』の誕生に、促進的役割をはたしたのである。即ち、近代化とは非宗教化—世俗化を意味するのではなくして、むしろ宗教的形成なのだ—ということこそ Weber は述べたかったのである。

- (1) 『ジェントリーの勃興』 四一頁
- (2) 『宗教と資本主義の興隆』 上巻一四九頁
- (3) Tawney の研究を捨てるのではなく、Tawney の分析をもっと深めることによって、gentry 階級はよりはっきりした姿を現すことになるのではないだろうか。
- (4) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 上巻八五—九〇頁
- (5) 前掲論文 上巻一三五頁
- (6) 前掲論文 上巻一一八頁
- (7) 前掲論文 下巻三三一—三三四頁